

「技術室報告」の発刊にあたって

京都大学防災研究所 所長
教授 池淵周一

平成3年4月の京都大学総合技術部および各部局技術部の発足を契機に防災研究所技術室が平成8年5月に設置された。以来、丸4年を迎えるところとなりました。この間、防災研究所そのものの改組・拡充があり、その設置目的を「災害に関する学理の研究及び防災に関する総合研究」とするとともに、全国共同利用研究所さらにはCOE機関としての活躍を益々期待されることとなり、教職員スタッフ一丸となって、その進展を図っているところである。このことは技術室の果たす役割の重要性をきわだたせており、研究・教育を支援する専門的な技術がますます高度になってきていることでもある。研究所の一つの大きな特徴である実験・観測技術を担う遠隔地でのたゆまない観測技術の改良・維持・新しい実験・プロジェクト観測を支援する工作・測器開発、高度情報通信技術、計算機環境の整備技術、ホームページ・文書処理等の事務効率技術等、技術室への要求は多岐にわたり、その技術面での貢献への期待が多大なものになってきており、新しい基礎技術の開発も求められている。

こうした要求にこたえていかなければならない一方で技術室をとりまく環境には厳しいものがある。定員削減、技術室のスタッフの高齢化、研究所全体における予算財源確保の厳しさなどである。もちろん定員削減に対しては補充・増員要求をかける一方、業務内容の多様化・質的变化にも対応すべく、情報処理技術その他技術エキスパートの存在・確保・年齢構成の多様化、隔地観測所の技官と教官スタッフの連携強化など検討すべき事項も多い。技術室がコーディネーターとなり各業種、隔地観測所のスタッフとの連携ネットワークのマネジメントをパワーアップすることも求められよう。そのためにも技術室スタッフが個別部門から統合化・総合化に向けた機能発揮、技術研究、異業種交流とあわせ教官スタッフ自身も従前にもまして連携強化が求められよう。

従前から技術室通信が発行され、94号を重ねて、技術室の活動を発信してきたところであるが、設置から4年目の節目を迎えるこの時期、技術室として種々の活動を「技術室報告」としてまとめ発刊することになり、これを契機により一層の技術的基盤の増強が期待されることです。

この冊子の誕生とともに、学術研究に関連する技術的研究や、技術開発がより一層進められ、優れた技術を身につけ、その技術に誇りをもって益々研鑽されんことを祈念するとともに関係各位のご助言をいただければ幸いです。